

平成28年度第2回学校評議員会の実施報告書

学校名

岐阜県立可茂特別支援学校 校長 鈴木 隆司
所在地 美濃加茂市牧野 2007-1 電話 0574-28-3150

- 1 会議の名称 岐阜県立可茂特別支援学校学校評議員会
- 2 会議の構成 委員 板津幹彦 東和組立株式会社代表取締役
大脇房夫 レストラン・リリアーヌ経営
前田直子 可児市発達支援センターくれよん所長
水谷 敬 元公立学校校長
山田康之 下米田地区自治会会長

学 校 鈴木隆司 校長
中川智治 P T A会長
辻川起和 事務部長
長野武郎 教頭
河合浩司 小学部主事
石原和寿 中学部主事
林 昭男 高等部主事
高井深雪 教務主任
- 3 会議の目的 学校運営等について地域住民や保護者から幅広く意見を求め、教育活動の活性化につなげるとともに、地域に開かれた学校づくりを推進する。
- 4 会議の開催 平成29年2月20日(月) 9:30~10:45
可茂特別支援学校 会議室
- 5 会議の概要
 - (1) 校長挨拶
 - (2) 各学部の活動報告 各部主事
 - ・各部主事がスライドに沿って説明
 - (3) 保護者アンケート結果について 教頭
 - ・全般に「A:よくあてはまる」「B:ややあてはまる」の合計が80%を超えており概ね高評価と受け止めている。
 - ・「特別支援教育の専門性の向上」「家族との連携」は今後も継続的な課題である。
 - ・項目によって「わからない」のポイントが高いものについては、何をどう伝えるかが課題と捉えている。

(4) 作業製品の価格設定について

○提案

教頭:第1回学校評議員会に価格設定されたものに、新規に製品を追加したいので、以下の5点の価格について検討したい。

- | | |
|-----------|------------------|
| ① 軽作業班 | コースター：¥100 |
| ② 木工班 | カッティングボード：¥800 |
| ③ 木工班 | スマホスピーカー：1000 |
| ④ 製菓班 | 焼き菓子（1本売り）：¥1000 |
| ⑤ 総合サービス班 | 洗車：¥500 |

○質疑応答

評議員：作業製品を販売した売り上げの利益はどのように使うのか？

学 校：県の予算上では、売上額を材料費等の経費に充当することになっている。その中で、いわゆる利益がある学校では、予算計上している特別支援教育課での調整後、作業学習に必要な備品を購入する費用に充てられる。

評議員：売れ残った製品はどうするのか。

学 校：完売し、売れ残ることはまずない。

評議員：アンテナショップやインターネット販売などは考えていないのか？

学 校：作業製品の販売は、生徒自身の対面販売が基本なので考えていない。

○検討

価格設定については、適正との判断であり提案通りに決定した。

(5) 学校評議員の意見

意見1： 学校の活気が年々増しているように感じている。

卒業後の就労と学校での作業学習とのつながりはあるのか。

「物を作って、販売し喜んでもらえる」経験は達成感があるが、実際の就労先、一企業では、その達成感を得ることは難しい。現実の仕事は、工程の一部、単純作業の繰り返しが主になる。例えば、可茂特支の卒業生で、担当している単純作業のスピードの速さは関係者から評価が高いが、本人が「達成感・成就感」を感じているかは難しい。結果、就労してから、自分の思いと違ったということも起こりうる。その現実とのギャップを学校教育においても考えてもらえるとありがたい。仕事をすることでお金が稼げる、そして自分のしたいことができる、欲しいものが買える。お金を稼ぐための仕事として生きがいになるのも実社会では事実である。

→学校： 必ずしも作業学習で身に付けた「技術」が就労に結びついてはいない。働く意識、意欲を育てることを目的としている。「仕事=成就感」というような理想像の教員の意識を変える必要がある。現実の厳しさを知り、我慢する力や、持続する力等を育てることも重要になる。

社会の変化に応じ、「物を作る」だけが仕事ではない。作業種についての再構築をする時期でもあると考えている。

意見 2 : 仕事は楽しいことばかりではないのは事実だが、同時に仕事の楽しさを若い世代に伝えることも大切にしたい。

小学部の「仲間との関わりを大切にする」ことは非常に良いこと。継続してほしい。

中学部の選挙の取組は興味深い。選挙権が 18 歳になったことを踏まえて、社会適応していくために良いことと思う。学校外での音楽発表の機会も良い経験として有意義に思う。

高等部の「思いやりの心を育てる」ということは、とても大切なこと。社会人として「思いやり」は何より大事なことになってくる。作業学習と就労は直結しないかもしれないが、「物を作る」ことの喜びは大切にしてほしい。

部活動は、「礼」を学ぶ上でとても良い機会。先輩後輩の関係等、社会に出る上でも貴重な経験になる。

意見 3 : 生き生きとした子どもたちの姿を見ることができた。「くれよん」は、幼児の療育の場、改めて子どもたちの将来を見通して療育を考えることが大切と感じた。目的に向かって我慢する力や、自分のことだけ考えずに今はみんなと一緒に頑張る力が将来の働く力につながっていく。

意見 4 : 人との関わりを積極的に進めると、そこにはトラブルが発生するのは仕方ない。人と接触を断てばトラブルも起こらないが、人は育たない。トラブルを避けることだけを考えるのではなく、何か起きた時にその情報が素早く管理職にも伝わり、組織的に対応できるかが大切になる。

社会的な情勢からは、学校の防犯体制を整えることも重要課題であろう。この学校の開放感の良いところだが、同時に防犯対策の強化も進めてほしい。教員と児童生徒の関係におけるリスクも高い時代。普段から保護者と十分な連携を図ることが重要になる。特別支援学校では、子ども一人一人の抱える問題も様々である。個々の問題に誠実に対応することが基本であり、管理職はきめ細かく把握していることも重要になる。

(6) 閉会

校長挨拶 : 社会参加、社会自立は高等部だけの課題ではない。むしろ小学部からどう育てるか、まさにキャリア教育の課題と考えている。小さいうちにこそ「集中すること」「やる気」「意欲」のレベルを高めることが大切。そのためは、座学ではなく、より体験的な活動の中で、「自分で決めて」「自分で行動する」ことが必要である。

単純に楽しいだけの「笑顔」ではなく、その先の達成感、成就感に満ちた「どや顔(得意顔)」を引き出していく教育活動を進めていきたい。